

豊橋市における市街地隣接地域の大葉温室園芸

前 沢 由美子 *

I 序 論

温室園芸地域の研究には輸送温室園芸地域の研究と近郊温室園芸地域の研究とがあり、近郊温室園芸地域の研究はさらに市街地温室園芸地域と都市外縁の温室園芸地域の研究に分けられる。市街地温室園芸地域の研究には沢田¹⁾・阿部²⁾らのものがあり、都市外縁の温室園芸地域の研究には沢田³⁾のものがある。

近郊温室園芸地域の研究にはこれらの他、市街地と都市外縁の温室園芸地域の2つの中間的な位置に存在する温室園芸地域がある。この研究には飯田⁴⁾らのものがあるが、数は多くはない。近郊温室園芸地域の研究を主としている沢田⁵⁾においてもこの2つの地域の中間的性格を持った地域、すなわち市街地の近接地域に存在する温室園芸地域の研究に欠けるものと思われる。そこで本稿では市街地の外縁、またはその隣接地域に位置する豊橋市の大葉(料理つま物用青しそ)温室園芸地域の実態を明らかにし、その形成・発展の基盤と要因について考察することとする。

II 豊橋市の大葉生産温室園芸地域の概観

豊橋市の温室園芸の歴史は明治期にまでさかのぼることができ、その発祥年次は明治34年である⁶⁾。明治期においてすでに、後に大きく発展するトマト・メロン・キュウリなどの温室栽培が試みられた。さらに昭和4年には豊橋温室園芸組合を結成

して生産者の団結がはかられた⁷⁾。後のこの豊橋温室園芸農協は、昭和55年11月の組合員が238名であり、そのうち大葉生産者は112名である⁸⁾。大葉・花穂・菊花・菊葉・観葉などの生産者が多く、従来からのメロン・トマトなどの生産者は少ない。この豊橋温室園芸地域は主に豊川の沖積地に集積しており、豊川の自然堤防上の畑作地域に集中している。

愛知県における豊橋市の大葉生産の地位は、1980年現在の全県延べ栽培面積7,900aのうち豊橋市が6,250aとなっており⁹⁾、29.1%に達する。大葉の愛知県内の生産地は東三河地方に限られており、豊橋市の他には豊川市・小坂井町・一宮町などの数地域にとどまる。豊橋市で始められた大葉栽培が、周辺の豊川市・小坂井町に広がったものである。

このように愛知県全体の約80%の延べ栽培面積を持つ豊橋市の大葉産地は、愛知県全体の大葉の生産量や出荷量を大きく左右していると考えられる。そこで豊橋市の全国に対する位置を見る代わりに、愛知県の全国に占める地位を見ることにする。表1は、東京都・大阪市・名古屋市の各中央卸売市場別に、愛知県産大葉の地位を出荷数量から見たものである。愛知県産大葉の占有率は、東京都で88.4%、大阪市で52.1%、名古屋市で96.6%となっている。愛知県に次ぐ大葉産地としては大阪府・高知県・茨城県などがあげられるが、愛知県産大葉の市場占有率の高さは明白である。

このような市場占有率の高い豊橋大葉生産地域

* 豊田市立青木小学校教諭

表1 市場別・産地別大葉出荷数量とその比率 (単位: kg, %)

市場	東京都		大阪市		名古屋市				
順位	都道府県	出荷数量	比率	都道府県	出荷数量	比率	都道府県	出荷数量	比率
全体		446,857	100.0		261,726	100.0		153,332	100.0
1	愛知	395,127	88.4	愛知	136,352	52.1	愛知	148,109	96.6
2	高知	23,743	5.3	大阪	103,012	39.3	高知	3,119	2.0
3	茨城	23,620	5.3	兵庫	11,218	4.3	岐阜	1,696	1.2
4	東京	658	0.1	奈良	9,035	3.5	千葉	299	0.2
5	埼玉	589	0.1	高知	1,524	0.6	大阪	84	0.05

(S.55年東京都中央卸売市場年報・S.55年大阪市中央卸売市場年報・S.55年名古屋市中央卸売市場年報による)

の中で、その特色をよく表わしていると思われる市街化区域内の産地である吉川・三ツ相地区、市街化区域に近接した産地である長瀬・大村地区を、¹⁰⁾実態調査地域に選定した。

III 市街地内労働力に依存する大葉生産の地域構造

1. 大葉温室園芸の生産構造

はじめに大葉の栽培面について概略しておく。大葉は施設においては年間平均2.5回作し、周年栽培が行われる。は種から定植までに、夏ならば30日ほど、冬ならば50日ほどかかる。定植は1ベッドに2条植えされることが多い。定植から収穫までに1か月ほどかかる。施設で周年栽培を行うためには冬期の加温が必要となり、加温は11月上旬から3月一杯まで行われる。この加温は自動調節されるようになっており、夜温19°C以上に保たれている。この加温は成育と花芽の形成防止¹¹⁾の2つの意味を持つ。花芽の形成防止にはさらに電照が必要である。日照時間の不足を補うため¹²⁾であるが、ほとんどの農家では年中電照している。

この大葉生産は労働集約性が極めて高く、その労働力は家族労働力のみではまかないきれない。そこでつもとり作業のために「つみこ」と呼ばれる人々を雇用し、出荷用のバック詰め作業のた

表2 調査農家の営農概況 (単位: 人, %, a)

地区	地区				平均
	吉川	三ツ相	長瀬	大村	
1戸当たり家族労働力	2.7	3.1	2.9	3.2	3.0
専業農家率	57.0	67.0	62.0	55.0	60.0
1戸当たり所有水田面積	25.1	32.8	67.4	57.7	47.4
1戸当たり経営水田面積	3.3	11.7	40.3	42.7	28.1
1戸当たり所有畑面積	18.0	15.4	25.8	29.1	23.0
1戸当たり経営畑面積	9.4	8.5	4.2	7.3	6.5
1戸当たりガラス室面積	24.8	23.4	6.6	11.0	14.8
1戸当たりハウス面積	2.5	3.9	16.4	17.5	11.5
1戸当たり施設面積	27.3	27.3	23.0	28.4	25.9

注. 経営面積は現在耕作をしている耕地の面積を示す。調査戸数40戸(吉川7戸・三ツ相9戸・長瀬13戸・大村11戸)。(1981年8月実態調査)

めに大葉内職者を雇用する。こうして大葉生産は、主に大葉生産農家・つみこ・大葉内職者の3者によって、分業体制が組まれて成立しているのである。

2. 大葉温室園芸の地域構造

大葉温室園芸地域 ここでは大葉農家の実態とその位置する地域について分析する。大葉栽培を初めに志向した農家は、温室経営としては比較的中規模の農家であり戦後になって温室園芸を開始し、施設経験15年～25年といった温室農家である。

次に表2で大葉栽培農家の経営実態を見る。1戸当たり家族労働力は3人であり、専業農家率も60%と比較的高い。経営耕地面積は、経営水田面

積平均28.1a・経営畑面積6.5aと極めて零細経営である。しかし所有耕地は水田47.4a・普通畑23.0aであって、休耕耕地がかなり多い。これは大葉栽培に専念するために、水田・普通畑にかかる労力を減少させたためである。こうして大葉の単一栽培への傾向が強まった。

次に表3に雇用労働力を示した。1戸の大葉生産農家で、内職者を平均16.2人、つみこを3人の計19.2人も雇用している。表3で見ると、市街化区域内に位置する吉川地区では雇用労働力が比較的充足しており、市街化区域外縁に位置する大村地区では雇用労働力の不足が指摘される。このように大葉農家1戸当たり19.2人も雇用労働力を使用する大葉栽培は、規模拡大に伴って専作化が著しくなる。

大葉生産農家の多くは、豊川の沖積地に位置する(図1参照)。これは前述のとおりである。社会的条件から見ると、大葉生産農家は市街化区域もしくはその隣接地域に位置している。この市街化区域も農業を営む余地の残された外縁部、または新興住宅地域である。

ここでもう少し具体的に把握するために事例農家の動向を見ることにする。表4は早期に大葉栽培を開始した大葉生産農家の事例として、吉川町の○農家の経営概要を示したものである。○農家は温室建設のために水田・普通畑とも失い、この25年近くの間には温室園芸主体の営農を行って来た。施設園芸を始めたのは昭和28年であり、それから10年して大葉栽培を始めている。はじめの10年はこの地域で一般的なメロン・トマト・キュウリの栽培を経験している。現在800坪(26.4a)の施設で大葉を栽培し、内職者20人・つみこ5人・その他2人の計27人の雇用労働力を使用している。

つみこ雇用地域 ここでは雇用労働力のうちつみこについてその実態と雇用地域を明らかにする。雇用労働力としてのつみこは、すべて女子である。

表3 調査農家の雇用労働力状況
(単位:人, a)

地区	吉川 三ツ相 長瀬 大村				平均
	吉川	三ツ相	長瀬	大村	
1戸当たり雇用内職者数	19.0	15.8	15.8	15.0	16.2
内職者1人当たり負担面積	1.4	1.7	1.5	1.9	1.6
1戸当たり雇用つみこ数	4.7	3.6	2.0	2.7	3.0
1戸当たり施設面積 つみこ+家族労働力	3.7	4.1	4.7	4.8	4.3

注。ほとんどの大葉農家では、大葉の結束は自宅では行わない。またつみとり作業は、家族労働力も使用する。(1981年8月実態調査、調査農家40戸)

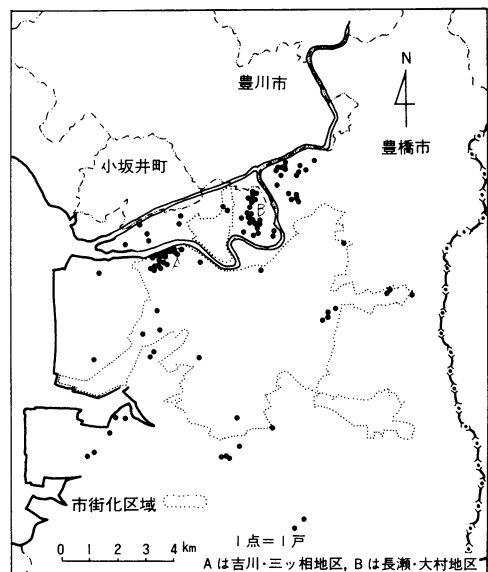


図1 豊橋市大葉生産農家の分布(1980年)

(1980年豊橋温室園芸農協
組合員名簿より作成)

年齢は20代から60代まで様々であり、かなりの高齢者も雇用されている。一般的にはパートとしてすらも雇われないような人々を労働力として使用しているところに1つの特色がある。つみこの経験年数は、古い人でも10年程、今年始めたばかりという人もかなりいて、概してあまり長くは続¹³⁾いていない。作業時間は1日平均5.8時間程であるが、これは個人差が大きい。作業時間はつみこの

表4 事例農家(吉川町M, O)

(1)家族労働力 3人(主人46歳,妻40歳,母68歳)

(2)経営耕地 普通畑・水田はS.30年までそれぞれ40a・110aほどあったが,普通畑は温室建設の資金作りのために売却,水田はハウスを建てるためにうめた。

(3)温室園芸の経緯 ガラス室はS.28年に90坪(3a)から始めた。最初はトマトを栽培し,S.30年にメロン,S.31年にキュウリを加えていった。その後,市場の動向もあり,大葉栽培をS.38年に始めた。その時ガラス室を300坪(10a)持っていたが,そのうち100坪(3.3a)で大葉を始めた。他の芽物としては,貝割大根を30坪(1a)ほど行っていた。現在ガラス室560坪(18.5a),ハウス240坪(8a)を所有し,そのすべてで大葉栽培を行っている。

(4)施設利用型
(S.56.9.26)

	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
温室8a	A			B			C					
温室7a							A			B C		
温室3a							A			B C		
ハウス8a												

Aはは種
Bは定植
Cはつみ始め

(5)大葉栽培 加温は11月上旬から3月一杯まで行う。電照は年じゅう行い夏は1時間ほど冬は3時間以上必要である。

(6)家族労働分担 主人は主に施肥・消毒・灌水などの温室管理,妻は近所の内職者まわりとつみとり作業,バックづめを行う。母はつみとり作業と大葉のバックづめ作業を行う。

(7)雇用労働者 S.56年9月29日現在で内職者20人,つみこ5人,内職者からの大葉回収業者2人の計27人を雇用している。そのうちつみこ1人,内職者まわり1人の計2人は親せきの者である。内職者を地域別に見ると,吉川町5人・西口町2人・栄町1人・東雲町5人・東郷町3人・東田中郷町1人・前畑町2人・東新町1人である。年齢別に見ると,30代3人・40~50代10人・60代以上7人である。
つみこは地域別に見ると吉川町1人・馬見塚町1人・高須町2人・東雲町1人である。この5人のうち1人は農家の主婦である。
内職者20人のうち,常時2~3人は休む人がでる。つみこは2人,ひどい時には3人も休むことがある。雇用方法は紹介による。

都合で自由にすることができるからである。1か月平均労働日数21日という点も同様である。このつみこにもう1つ特徴的なことは,兼業農家の主婦が農閑期を利用してする仕事であるということである。これは同じ町内の大葉生産農家に頼まれるため,地縁的な雇用労働力の獲得である。

図2はつみこの雇用地域を示したものである。

吉川・三ツ相地区は町内あるいはその周辺でつみこを雇用している場合が多い。長瀬地区は主に豊川市に雇用地域が広がっている。全体的に見ると,市街化区域内につみこ雇用地域があるといえるが,その隣接地域にも広がりが見られる。出来る限り町内もしくはその周辺でつみこを雇用しようとする,大葉生産農家の努力がうかがわれる。

大葉内職者雇用地域 次に大葉内職者について,その実態と雇用地域を検討する。大葉内職者はつみこ同様すべて女子である。年齢は,20代後半から30代前半にかけての世代と,40代後半以上の世代が多い。これはどういうことであろうか。20代後半から30代前半の世代というのは比較的幼ない子供を抱えている年代であり,そういう主婦たちは外に働きに出ることができない場合が多い。また40代後半から上の世代は子供も成長し自宅を暇を持て余している場合が多い。外に働きに出るにもその年ではなかなかよい職場は見つからない。こうした2つの世代の労働力は,つみこと同様に一般には労働力としては雇われにくい人々であり大葉生産農家はこうした家内潜在的労働力を巧みに利用しているのである。内職者の経験年数は,つみこ以上に長続きしておらず,大葉生産農家にとっては,つみこを雇用する以上に内職者を雇用することは難しい。それでも,内職者が内職者を紹介するといった形で,大葉生産農家は内職者を獲得している。1日の作業時間は平均5時間程で,1か月の平均労働日数は平均21日である。しかしこれも個人差が大きいのはつみこと同様である。

図3は大葉内職者の雇用地域を示したものである。吉川・三ツ相地区は比較的近距離から内職者を雇用していて,雇用労働力に恵まれた地域である。長瀬地区は豊川市にかなり集中をしている。大村地区は長瀬地区とは対照的に,豊川を越えて豊橋市内に雇用地域を持っており,距離的にもか

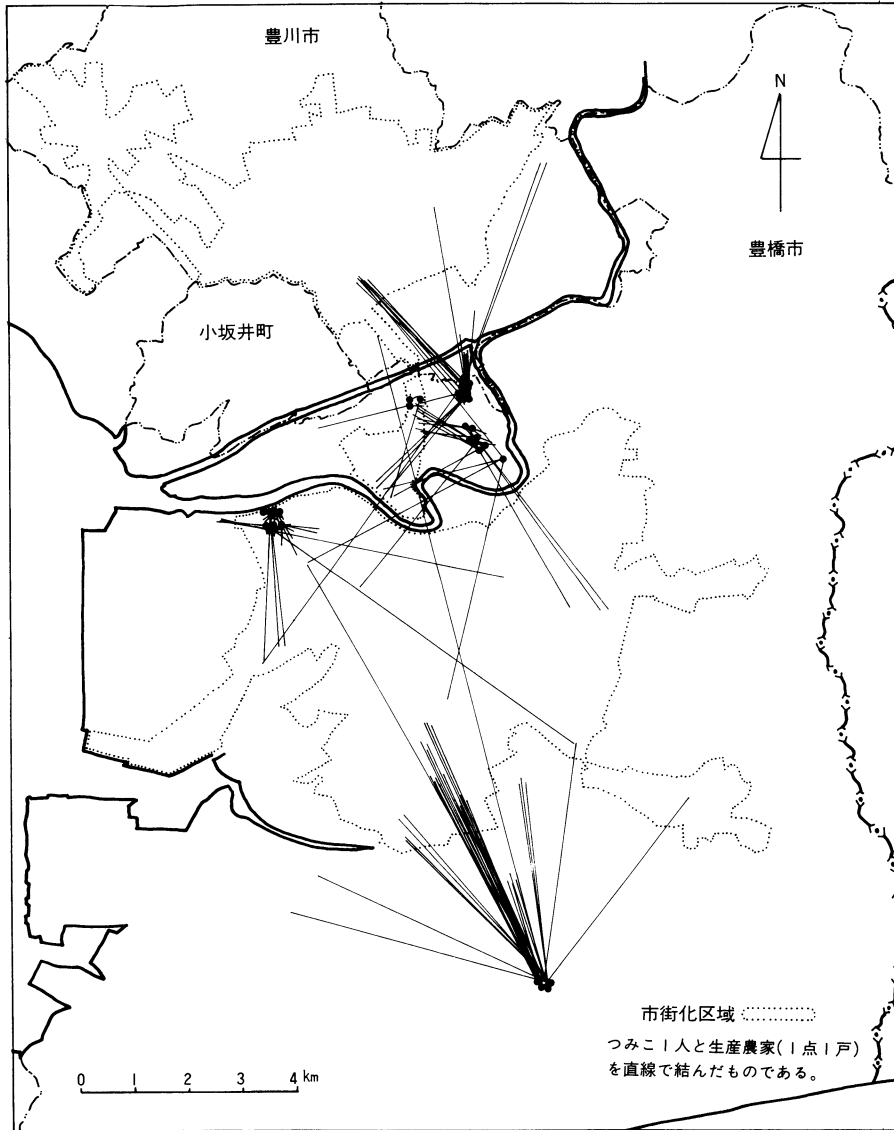


図2 つみこ雇用地域

(1981年8月実態調査)

なり広範囲である。豊橋市・豊川市のいずれに内職者雇用地域を持つ場合でも共通しているのは、その市街化区域内にほとんど集中していることである。大葉生産農家は、こうしてつみこ・内職者いずれの場合にも、その雇用を市街化区域に依存しているのである。ただし少し細かく見れば、つみこ雇用地域は市街化区域内とその隣接地域に位

置するのに対して、内職者雇用地域はそのほとんどが市街化区域内であるという点である。

3. 大葉の出荷体制

パックに詰められた大葉は、出荷用ダンボール箱に入れられ、各農家によって夜8時から8時半の間に出荷場に運ばれる。翌朝、前日までのストック分と共に、定量が配荷される。これらの共選

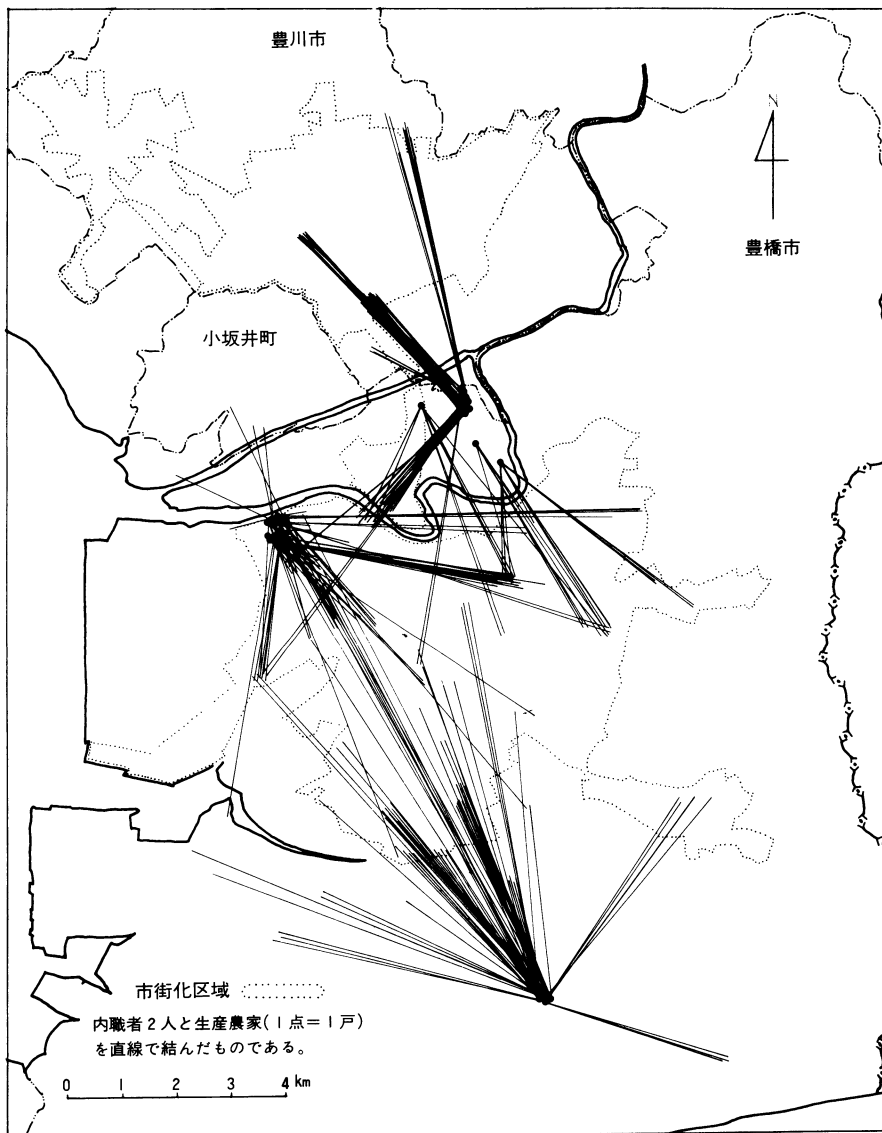


図3 大葉内職者雇用地域

(1981年8月実態調査)

共販システムは、すべて組合の下で行われている。

市場への輸送はトラック・貨車・航空便などが使用される。少し古い昭和50年においては豊橋温室園芸農協は京浜に29社(55.8%)、京阪神に15社(28.8%)、中京に3社(5.8%)、その他に5社(9.6%)、計52社の市場へ出荷している。出荷期は、自然条件による6月と単価の上昇する12月に

ある程度のピークが見られるが、大葉は周年栽培が行われており、安定した出荷体制をとっているといえる。

IV 大葉生産地形成の基盤

1, 豊橋温室園芸の伝統性

豊橋に大葉生産地が形成された基盤にはいくつ

表5 調査農家の温室経営経験
(単位:年 作物数)

地区	吉川	三ツ相	長瀬	大村	平均
ガラス室経験年数	39.7	38.9	20.5	14.5	26.0
ハウス経験年数	15.3	13.2	19.0	10.1	14.6
施設経験年数	39.7	39.1	25.2	29.3	27.7
経験施設作物数	5.9	4.5	4.8	2.3	4.2
1作物当たり栽培年数	6.7	8.7	5.3	12.7	6.6
大葉栽培経験年数	13.9	13.6	11.6	10.4	12.1

1981年8月実態調査, 調査農家40戸(吉川7戸・三ツ相9戸・長瀬13戸・大村11戸)。

かあげられるが, そのうちで最も重要な基盤と考えられるのは豊橋温室園芸の伝統性である。この伝統性には大きく分けて3つが考えられる。1つは温室園芸地域としての先進性である。前述したとおり豊橋温室園芸の創始年は明治34年である。日本の施設園芸地域のうち, 明治期に創始期を迎えたところはこの豊橋の他はマスカットで有名な岡山県の明治19年(1886年)¹⁴⁾などの数少ない地域であり, そこに続く地域は川崎・東京・浜松¹⁵⁾など大正期に入ってからの創始である。現在大規模温室園芸地域として存立している高知・渥美¹⁶⁾は, いずれも昭和初期の創始である。このように豊橋は, 全国における施設園芸の先進地である。

2つ目は新しい栽培作物の開発における伝統性である。豊橋では, 栽培作物の作柄が, 時代によってよく変遷して来た。表5の1作物当たり栽培年数を見ると平均6.6年である。6.6年ごとに新しい作物が栽培されてきたことになる。¹⁸⁾次の図4で豊橋温室園芸発展の経緯を, 各温室農家の施設拡張状況から見ることにする。本格的な施設拡張が行われたのは昭和40年以降で, 農家が温室経営を大葉専作に切り変えた時期である。こうしてみると豊橋温室園芸地域は, 栽培作物を次々と転換し, そのたびに施設の拡張を行って来た地域であり, 大葉の専作に転換するに及んで大規模な発展をとげたのである。

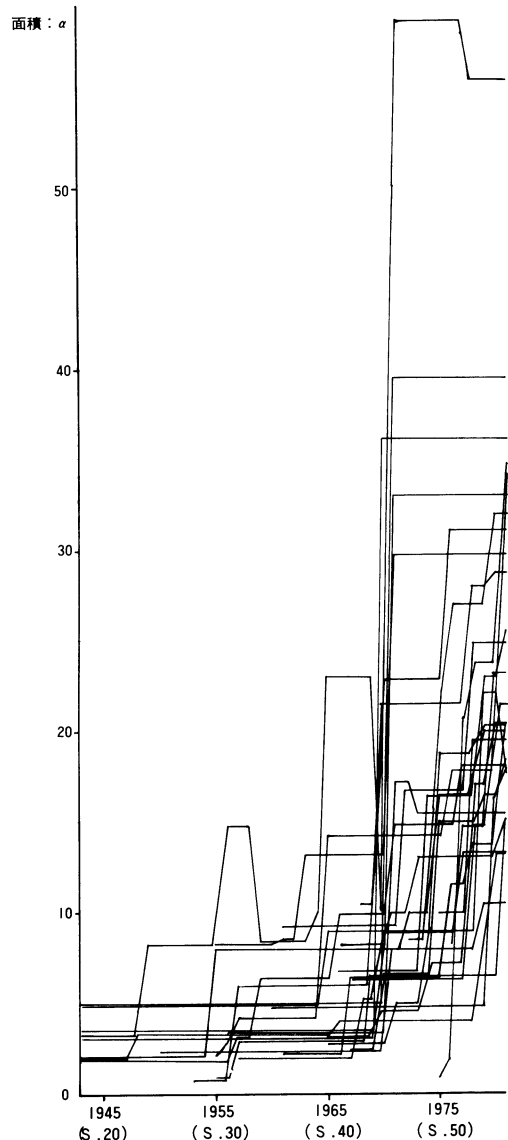


図4 大葉栽培農家の施設拡張状況
(1981年8月実態調査)

3つめの伝統性は組合の指導性である。前述のとおり豊橋温室園芸農協が結成されたのは昭和4年のことであるが, その初代組合長・二代目組合長は, 共に豊橋で最初に温室経営を始めた先覚者である。こうした人々が初期の組合を指導していた意味は非常に大きい。特に二代目組合長は,

全国に先がけてトマトによる共同選果・共同出荷体制を確立している。こうして園芸農協は、豊橋温室園芸の指導的な位置を確立する。こうした創始期の早さ、栽培新作物の開発、組合の指導性という3つの伝統性が、豊橋温室園芸地域を存続・発展させ、ひいては豊橋大葉温室園芸地域としての基盤となっているのである。

2. 高級料理の大衆化—大葉の消費の伸長—

大葉は高級料理のつま物であるために、従来からその消費はかなり限定されるものと考えられてきた。しかし日本の経済成長の結果、食生活のレジャー化が進み、¹⁹⁾ 外食の機会が増加するにつれて大葉の消費は着実に伸びてきている。その一方で、豊橋の大葉生産者は、独自に大葉消費伸長のための努力をはらってきた。料理の講習会を開き、大葉を使用した料理法のパンフレットを配布して²⁰⁾ きた。このように、時期的に大葉消費伸長の時期であったということ、生産者の側からも消費伸長へのアプローチがあったということが、豊橋大葉生産者の量産体制の基盤の1つになっているのである。

3. 農業兼業化の遅れ

豊橋市の農家総数は、1960年の11,517戸から1980年の8,302戸へと、20年間に3,215 (27.9%)の減少を示した。さらに専業農家率は、34.5%から28.7%へと減少した。その一方で、²¹⁾ 第2種兼業農家率は27.1%から47.7%と増加している。

しかしこの20年間の推移のほか1980年時点を見ても、太平洋ベルト地帯に位置している豊橋市は未だかなり農業比重の高い地域である。これは、愛知県及び愛知県30市と比較することにより、一層明確となる。愛知県及び愛知県30市の1980年における専業農家率はそれぞれ10.8%・9.3%であり、第2種兼業農家率はそれぞれ75.0%・77.5%である。この農業兼業化の遅れが、市街化区域の外縁またはその隣接地域という位置に温室園芸を

存続させ、その故に大葉栽培を可能にしているのである。

V 大葉生産地の形成・発展の要因

1. 市街地婦人労働力の利用

大葉農家にとっては、つみこと大葉内職者をいかに確保するかは最も重要な問題である。すなわちこの雇用労働力を確保できるだけの人口的背景を持った地域でなければ、大葉温室園芸は成立しないのである。実態調査によれば、大葉内職者590人のうち574人(97.3%)までが市街化区域に依存しており、市街化調整区域への依存率は2.7%にすぎない。つみこの場合もほぼ同様であり、若干市街化調整区域への依存率が高いものの、市街化区域への圧倒的な依存率には変りはない。市街化区域のうちでも特に、古くからの住宅地と新興住宅地への集中が目立つ。古い住宅地には比較的壮年層から老年層の女子労働者が多く、新興住宅地には若年労働者が多いためである。このように市街化区域における豊富な婦人労働力が、大葉生産形成の要因の1つになっている。

2. 周年栽培による温室経営の安定化

豊橋温室園芸地域では、大葉の専作が開始される以前にはトマト・メロン・キュウリなどを栽培

表6 大阪市中央卸売市場に入荷した愛知県産の栽培作物別市場価格・入荷量の比較

	大 葉	メ ロ ン	ト マ ト
年平均価格	2,726 100	522 100	299 100
年最高価格	5,940 218	719 138	516 173
年最低価格	1,100 40	369 71	109 36
年平均入荷量	10,580 100	150,535 100	78,492 100
年最高入荷量	13,200 125	359,594 239	179,248 228
年最低入荷量	8,200 78	7,361 5	27,660 35

注. 1. 大葉は年間入荷、メロンは1・2・3・4月入荷なし、トマトは8月入荷なしである。

2. 右側の数字は年平均価格・年平均入荷量をそれぞれ100とした場合の指数である。

(S.54年大阪市中央卸売市場年報による)

していた。このトマト・メロンなどから大葉へ転換したのはなぜか。表6を見るとメロンは大葉に比べて価格差が小さい。しかしトマトは最低価格と平均価格との差がやや大きく、トマトに対しては価格的に優位であろう。次に入荷量について見る。メロン・トマトとも最高・最低入荷量の差はかなり大きい。さらに出荷されない月がある。それに比べて大葉の出荷量はかなり安定しているといえる。すなわち価格の差がある程度あるにしても出荷量が比較的コンスタントであるため、大葉生産農家の温室経営はかなり安定するのである。さらに付け加えると、トマト・メロンの栽培技術は非常に高度なものが必要であるのに対し、大葉は未経験者でも比較的簡単に始めることができる。こうしたメリットの故にトマト・メロンから大葉への転換が進み、これが豊橋大葉生産地形成の1つの要因になっているものと考えられる。

3. 出荷体制の整備

図4を見ると、大葉生産農家には、ある程度共通した施設拡張時期がいくつか見られる。その1回目は前述した昭和40年前後の拡張期である。2回目は昭和45年前後である。これは昭和43年の共選共販の開始、44年の大葉の冷凍輸送の開始、45～47年にかけての保冷库の設置などの、低温出荷体制の整備といった一連の市場要求への対応の結果であると思われる。品質の一定したものが継続的にしかも大量に出荷されるという共選共販体制と夏期の荷傷みをふせぎ安定した大葉の周年生産出荷体制を整備する低温出荷体制などの市場の要求に沿った出荷体制を確立してきたことが、豊橋大葉生産地の発展の要因の1つになっているのである。

VI 結 論

①、以上のことから豊橋大葉温室園芸地域の実態が明らかとなった。豊橋市の市街化区域周辺には、

110余戸の料理つま物である大葉（青じそ）の温室園芸農家があり、小産地ながら全国比の極めて高い生産地域をつくっている。この大葉生産は大葉生産農家とつみこと大葉内職者の3者分業組織で成り立っており、都市近接温室園芸として独特の概観を持っている。

つみこは一般的には労働力となりにくい人々を労働力とし、地縁的・血縁的關係をフルに利用してこの労働力を得ている。このつみこの雇用地域は主に市街化区域内であり、若干その隣接地域にも広がっている。

大葉内職者は、幼ない子供を抱えた年代か、子育てを終えた年輩層が中心となっている。この内職者の雇用地域は、つみこ雇用地域以上に市街化区域に集中している。この雇用労働者は経験年数が短かく、生産農家に労働力確保の困難さの雇用問題を生み出している。

②、この豊橋大葉温室園芸地域の基盤は、第1に創始期の早さ、新栽培作物の開発、組合の指導性といった豊橋温室園芸地域の伝統、第2に時期的な、かつ生産者の努力による大葉消費の伸長、第3に豊橋市が太平洋ベルト地帯に位置しながらその中で比較的充実した農業的基盤を維持してきたということにある。

③、こうした基盤の上に大葉生産地域の形成・発展がなされたのは、1つには市街地婦人労働力を利用しえた地の利にある。2つめには大葉の出荷量の安定による温室経営の安定化があり、3つめには共選共販体制の早期整備、低温出荷体制などの市場の要求に基づいた出荷体制を確立してきた地域園芸組合の努力があったからである。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、終始御指導いただいた松井貞雄先生をはじめ、愛知教育大学地理学教室の諸先生方、ならびに御協力いただいた関係諸官庁・農家の方々に、厚く御

礼申し上げる。

注および引用文献

- 1) 沢田裕之(1968)：川崎市の花弁温室園芸地域地域研究11, P. 44~57.
- 2) 沢田裕之・阿部信之(1970)：東京「温室村」の性格と其の変化 地域研究13, P. 31~42.
- 3) 沢田裕之(1972)：神奈川県秦野市の花き温室園芸地理評45—8, P. 548~560.
- 4) 飯田美子(1967)：尾張平野における温室園芸地域の研究—海部郡佐織町の芽しょうが温室—愛知教育大学地理学報告27・28合併号, P. 22~28.
- 5) 「大葉」は商品であり、作物名は「青じそ」である。
- 6) 竹生欽次(1942)：一三豊橋地方の温室栽培 愛知県特殊産業の由来 下巻, P. 465~479所収.
- 7) 豊橋温室園芸農業協同組合(1977)：創立50周年記念誌.
- 8) 1980年豊橋温室園芸農協同組員名簿より。
- 9) 愛知県庁園芸農蚕課資料より。
- 10) 吉川・三ツ相地区, 長瀬・大村地区としたのは, 2つの理由による。1つは前者が市街化区域内, 後者がその隣接地域に位置することであり, 2つめは前者が比較的古い温室園芸地域であるのに対し, 後者は比較的新しい温室園芸地域であることである。
- 11) 花芽が形成されると, 葉が固くなり, 品質が急激に低下し商品価値を失う。
- 12) 大葉は短日植物であるために日照時間が短くなると花芽が形成される。
- 13) 人によっては体質的にかぶれる。そうした人は3か月も続かないという。
- 14) 松井貞雄(1974)：岡山県における温室ブドウ園芸地域の変容 地理評47—1, P. 1~20.
- 15) 佐々木清治(1932)：郊村の農業形態(一)—問題構成— 地理評8—4, P. 261~278.
- 16) 坂本英夫(1972)：高知平野東部の施設園芸—各種経営混在型の産地形成に関するマイクロ分析— 人文地理24—6, P. 1~33.
- 17) 松井貞雄(1967)：渥美半島における温室園芸の地域形成と地域分化 地理評40—8, P. 17~39.
- 18) これは主な栽培作物数であるから, 試験的に栽培したようなものも含めるとこの1作物当たり栽培年数はさらに短縮される。
- 19) 経済企画庁(1981)：昭和56年版国民生活白書。
- 20) 農家による聴き取りである。
- 21) 1980年世界農林業センサスによる。